

<原著>

# 青年期における非行化傾向と ふれ合い恐怖的心性および対人恐怖的心性との関連について

藤澤 周平・柴原 直樹

## Relations of Potential Delinquency to Commu-phobic Tendency and Anthropophobic Tendency in Adolescence

Shuuhei FUJISAWA and Naoki SHIBAHARA

The aim of this paper was to investigate relations of a tendency in juvenile delinquency to commu-phobic and anthropophobic tendencies. In total, 131 college students took part in this research (77males and 54 females). A tendency in juvenile delinquency was measured by 20 questionnaire items made by the authors. Commu-phobic and anthropophobic tendencies were assessed by 17 and 20 questionnaire items taken from Okada (2002) and Horii and Ogawa (1996), respectively. The results showed that the tendency in juvenile delinquency was composed of 4 factors such as "pursuit of pleasure," "display of criminally inclined behavior," "trouble in self-control," and "mischievous behavior," and that the two factors "pursuit of pleasure" and "trouble in self-control" were significantly correlated to the commu-phobic and anthropophobic tendencies.

**Key words :** Keywords: potential delinquency, commu-phobic tendency, anthropophobic tendency, adolescence  
非行化傾向、ふれ合い恐怖的心性、対人恐怖的心性、青年期

### はじめに

最近、日本の若者は変わったとよく言われる。社会情勢や環境の変化に伴い、彼らを取り巻く家庭内や学校内で生ずる心に起因する事件や事故が現代社会において多発することもその一因と言える。松井 (2000)<sup>1)</sup> は、国際比較によって日本の中学生・高校生が対人

関係や親子関係に問題を抱えていること、あまり望ましくない行為に対して非行許容性があることなどを指摘している。

この現代青年の心理的な変化を、①非行化傾向、②親子関係（父母の養育態度）、③対人関係（対人恐怖のおよびふれ合い恐怖的心性）の点から考察した研究は多い。その中でも、「非行化傾向と親の養育態度」との関係、「対人恐怖的心性およびふれ合い恐怖的心性

と親の養育態度」との関係についてはすでに報告されている。しかし、「非行化傾向と対人恐怖の心性およびふれ合い恐怖の心性」との関係はまだ明らかにされてはいない。この点について調査するのが本研究の目的である。

### 非行化傾向と親の養育態度

従来、少年犯罪の要因であった親の欠損や家庭の貧困、および本人の病的性格などが減少傾向を示し、非行の低年齢化傾向および中流家庭出身の増加が目立つようになった（金児・中塚, 1978<sup>2)</sup>）。このような非行化の原因は家族関係の希薄化によるもので、父母の養育態度がその背景にある（藤間, 2011）<sup>3)</sup>。父親の態度が放任主義で子どもに無関心であったり、逆に子どもに対するコントロールが強く厳格であるなど、父親と子どもとの情緒的結びつきが弱い場合や、母親の態度が過保護で口やかましく過干渉である場合に非行化傾向がみられる（土井, 1960<sup>4)</sup>；渡辺, 1961<sup>5)</sup>；星・小宮山・川田・椎名, 1976<sup>6)</sup>；藤田, 1983<sup>7)</sup>）。

また、山口（1980）<sup>8)</sup> は、親子関係の病理による影響について4つのパターンを挙げて説明している。まず、「期待過剰型の親子関係」で、親の関心が学業面のみになり、情緒的社会的側面に無関心となるために子どもが非行に逃避するパターン。次に、「溺愛型の親子関係」で、子どもの自主性を阻害し、そのために社会に適応できず非行化するパターン。さらに、「放任型の親子関係」で、十分な躾がなされず社会性が形成されないために自分の欲求を社会的に制御できず非行にはしるパターン。最後に、「しつけの無定見」で、親のしつけが都合によって変わり、一貫していないため子どもの社会性の形成を阻害し非行化するパターンで、親の権威失墜にもつな

がる。

### 対人恐怖の心性およびふれ合い恐怖の心性と親の養育態度

対人恐怖症は他人からの批判や嘲笑を恐れるあまり過度に緊張し、そのために他人を当惑させるのではないかと悩み苦しみ社会的状況を回避する。また、その回避の理由が身体的な形状や機能の欠陥を確信的に訴えるという特徴も有している。ところが、そのような身体的欠陥を訴えることなしに対人関係を回避する、ふれ合い恐怖症が新たに登場してきた（山田・安東・宮川・奥田, 1987<sup>9)</sup>；山田, 1989<sup>10)</sup>；福井, 2007<sup>11)</sup>）。

対人恐怖は、人と人が出会い顔見知りになる「出会いの場面」や中間状況的な人間関係（半知り状態）に困難を感じ、man-to-manの二者状況では比較的安定しているが、そこに人が加わり三人以上の関係となると不安感や緊張感が高まり発現する（笠原, 1972<sup>12)</sup>, 1977<sup>13)</sup>；山田ら, 1987<sup>9)</sup>）。これに対し、ふれ合い恐怖は、顔見知りからより親密な関係に発展する「ふれ合い場面」などの対人関係が深まる事態において困難を感じ、三者間状況は問題ないが、man-to-manの関係になると自分からふれ合いを深めなければと責任やプレッシャーを感じ発現する（山田ら, 1987<sup>9)</sup>；山田, 1989<sup>10)</sup>）。

このような臨床的な治療対象とはならないが、対人恐怖やふれ合い恐怖と共通する心理的傾向をそれぞれ対人恐怖の心性、ふれ合い恐怖の心性と呼んでいる（岡田, 2010<sup>14)</sup> 参照）。この対人関係を回避しようとする心理的傾向と親の養育態度との関係について最近研究されるようになった。沖本（2001）<sup>15)</sup> は、対人恐怖の心性と幼少期における両親の過剰な期待や過干渉との間に相関があることを示したが、特に母親が過干渉であったと感じて

いる人は対人恐怖的心性が高いことが後に報告されている（山崎，吉野，木下，小野，2012<sup>16)</sup>）。他方、ふれ合い恐怖的心性は日本的な父親不在型の家庭と関連があり（伊藤，2006<sup>17)</sup>）、父親の養護が少なかったと感じている人はふれ合い恐怖的心性が高いことも報告されている（山崎ら，2012<sup>16)</sup>）。

### 非行化傾向と対人恐怖的心性およびふれ合い恐怖的心性

対人恐怖的心性と攻撃性との間に関連があることを示した研究はある（西村・井上，2008<sup>18)</sup>）が、非行化傾向との関連を直接調べた研究はない。太宰・佐野（2012）<sup>19)</sup> も大学生における対人恐怖的心性と攻撃性との関連性について検討し、対人恐怖的心性尺度の中で「目が気になる悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「集団に溶け込めない悩み」の3つの尺度は攻撃性の全ての側面と関連しているが、「自分や他人が気になる悩み」だけは

他者ではなく自己への攻撃性のみに関連していることを指摘したが、思春期あるいは青年期にある中学生や高校生を対象にしたものではなかった。

そこで、前述したように「非行化傾向」と「親の養育態度」および「親の養育態度」と「対人恐怖的心性・ふれ合い恐怖的心性」の間に関連性があるなら、「非行化傾向」と「対人恐怖的心性・ふれ合い恐怖的心性」との間にも関連性がみられるであろうと仮説をたて（図1参照）、その仮説を検証するためにアンケートによる調査研究を行った。

## 方法

### 調査対象者

K大学の学生、男性77名（平均年齢＝18.6）、女性54名（平均年齢＝18.7）の計131

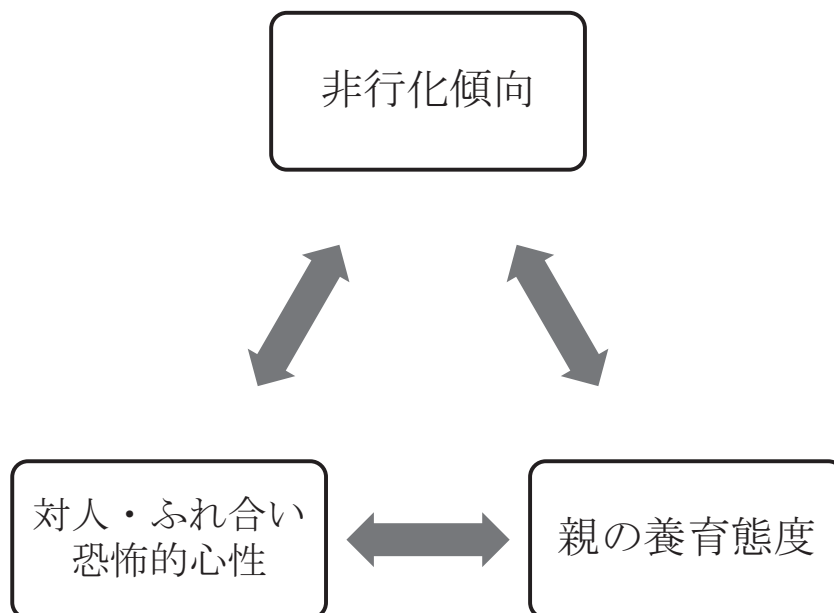


図1 非行化傾向、親の養育態度、対人恐怖・ふれ合い恐怖的心性の関係

名を対象にした。

### 調査期間

授業時間を利用し、2013年4月から5月にかけてアンケートによる調査を実施した。大学生に①非行化傾向、②ふれ合い恐怖の心性、③対人恐怖の心性に関する調査用紙を配布した後、回答方法を説明し、各項目について回答を求めた。調査用紙ならびに回答用紙は、調査終了後にその場で回収した。

### 測定尺度

本研究において、①非行化傾向、②ふれ合い恐怖の心性、③対人恐怖の心性に関する調査を行ったが、いずれも質問紙に対しても「あなたが高校生の時、どの程度であったか」という条件つきで回答を求めた。これは、調査対象が未成年の大学生であっても、高校生では非行化傾向ありと判断される行動や態度が彼らにとって許容範囲として扱われる場合があることによる。また、ふれ合い恐怖の心性および対人恐怖の心性の質問紙に対しても同様の条件を付けたのは、非行化傾向との関連性を調べるためである。

#### 1. 非行化傾向に関する尺度

秦 (2000)<sup>20)</sup> および進藤 (2004)<sup>21)</sup> を参考に、“非行化傾向尺度” 20項目を作成した。この尺度には、進藤が見出した①快樂追求傾向、②不良性顕示傾向、③無関心傾向の3つの成分に関する質問項目が含まれている。各項目について、“1：全くない” から“6：非常にある”までの6件法による回答を求めた。

#### 2. ふれ合い恐怖の心性に関する尺度

岡田 (2002)<sup>22)</sup> が作成した“ふれ合い恐怖尺度” 26項目のうち、因子分析で不採択

となった6項目を除外した17項目をふれ合い恐怖尺度とした。この尺度は、「対人退却」と「関係調整不全」の2つの下位尺度から成っている。各項目について、“1：全く当てはまらない”から“6：とても当てはまる”の6件法による回答を求めた。

#### 3. 対人恐怖の心性に関する尺度

堀井・小川 (1996<sup>23)</sup>、1997<sup>24)</sup>) が作成した“対人恐怖心性尺度” 6因子30項目の中から、「自分を統制できない悩み」、「生きることによって疲れている悩み」を除いた4因子20項目を使用した。その理由は、太宰・佐野 (2012)<sup>25)</sup> が指摘しているように、これらの因子は対人恐怖の心性の直接的な症状ではなく、症状へのとらわれから生じる二次的な悩みであることによる。

したがって、この尺度は「自分や他人が気になる悩み」、「集団に溶け込めない悩み」、「社会的場面で当惑する悩み」、「目が気になる悩み」の4因子構造から成っている。各項目について、“1：全然あてはまらない”から“7：非常にあてはまる”の7件法による回答を求めた。

## 結果

### 非行化傾向

非行化傾向の20項目に対して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。因子負荷が1つの因子について0.35以上で、かつ2因子にまたがって0.35以上の負荷を示さない19項目を選出し、1項目を不採択とした。その結果、4因子が抽出され、第1因子は「快樂追求」、第2因子は「不良性顕示」、第3因子は「自制困難」、第4因子は「迷惑行為」

と解釈された（表1参照）。非行化傾向19項目の信頼性を検討するために $\alpha$ 係数の算出を行ったところ、 $\alpha = .87$ という高い値を示したため、信頼性は十分と言える。

また、相関分析の結果、すべての因子間に有意な正の相関がみられた（表2参照）。さ

らに、各因子における性差を分析したところ、「不良性顕示」は男性の方が高く「自制困難」は女性の方が高いことが分かった。「快楽追求」および「迷惑行為」には有意な性差はみられなかった（表3参照）。

表1 非行化傾向尺度の因子分析

	1	2	3	4	共通性
4 病気などの理由がないのに授業をさぼる	.372	.313	.137	-.145	.435
5 髪を染める	.558	-.007	-.008	.092	.339
7 目立つ服装をする	.472	.249	-.028	-.040	.410
8 夜遅くまで遊びまわる	.791	-.001	-.100	.000	.574
10 酒やビールなどを飲む	.662	.098	-.011	.050	.550
16 親に黙って外泊をする	.609	.148	-.042	-.057	.468
19 授業中、携帯のメールやゲームに夢中になる	.535	.146	.032	-.069	.405
20 ゲームセンターで遊ぶ	.529	-.306	.019	.001	.164
6 テストの時カンニングをする	-.013	.564	.052	-.075	.311
9 タバコを吸う	.011	.730	.030	.109	.628
12 公園などにゴミを散らかす	.042	.650	-.032	.165	.543
17 道端につばを吐く	-.138	.802	-.005	-.025	.503
18 学校や家庭で暴力を振るう	.029	.425	.006	.204	.302
1 親や友達などに嘘をつく	-.022	.242	.703	-.166	.631
2 落ち着きがなくイライラしている	.128	-.084	.800	.041	.690
3 自分勝手に自己中心的である	-.165	-.026	.867	.018	.660
15 怒りを感じたとき、自分で抑えられない	.229	-.206	.386	.300	.315
13 公衆便所などに落書きをする	-.054	.302	-.030	.558	.466
14 電車やバスを待っている行列に割り込む	-.011	-.029	.031	.971	.930
不採択項目					
11 人との約束を守らない	-.074	.138	.311	.083	.142

表2 非行化傾向尺度の因子間相関

	快楽追求	不良性顕示	自制困難	迷惑行為
快楽追求	1.00	.571**	.373**	.271**
不良性顕示		1.00	.355**	.410**
自制困難			1.00	.218*
迷惑行為				1.00

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

表3 非行化傾向尺度の各因子における性差

	男性		女性		$t$	$p$
	Mean	SD	Mean	SD		
1. 快楽追求	2.25	1.04	2.32	1.10	-.353	.724
2. 不良性顕示	1.70	0.95	1.29	0.66	2.805	.006
3. 自制困難	2.71	1.12	3.15	1.02	-2.283	.024
4. 迷惑行為	1.16	0.47	1.18	0.50	-.159	.874

表4 ふれ合い恐怖的心性尺度における因子間相関

	対人退却	関係調整不全
対人退却	1.00	.499**
関係調整不全		1.00

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$ 

表5 ふれ合い恐怖的心性尺度の各因子における性差

	男性		女性		$t$	$p$
	Mean	SD	Mean	SD		
1. 対人退却	2.56	0.97	2.62	1.09	-.334	.739
2. 関係調整不全	3.11	1.16	3.25	1.25	-.658	.512

ふれ合い恐怖的心性

岡田（2002）<sup>22)</sup> が示した因子構造がそのまま使えるか検討するため、ふれ合い恐怖的心性の17項目に対して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。スクリープロット基準および因子の解釈可能性から2因子を選出したが、1項目が因子負荷0.3以下であったため不採択とした。この因子分析の結果は、岡田によるものとほぼ同じであったため、因子名を岡田に倣い「対人退却」および「関係調整不全」とした。ただし、「人と雑談するのは苦手だ」は「対人退却」因子として抽出されたが、岡田では「関係調整不全」因子に分類されたため、以後の分析対象から除外した。

また、相関分析により「対人退却」および「関係調整不全」の2因子間に有意な正の相関がみられた（表4参照）。さらに、性差について分析した結果、それぞれの因子において有意差は検出されなかった（表5参照）。

対人恐怖的心性

堀井・小川（1996<sup>23)</sup>、1997<sup>24)</sup>）の抽出した因子が利用できるか検討するため、対人恐怖心性の20項目に対して因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。スクリープロットを基準にして4因子を抽出した。この因子分析の結果は、堀井らによるものとほぼ同じであったため、因子名を彼らに倣い尺度Ⅰ「自分や他人が気になる」、尺度Ⅱ「集団に溶け込めない」、尺度Ⅲ「社会的場面で当惑する」、尺度Ⅳ「目がきになる」とした。ただし、「大勢の人の中で向かい合って話すのが苦手である」は「尺度Ⅰ」として抽出されたが、堀井らでは「尺度Ⅳ」に分類されたため、以後の分析対象から除外した。

また、相関分析の結果、これら4つの尺度間で有意な正の相関がみられた（表6参照）。さらに、これらの尺度すべてにおいて有意な性差は検出されなかった（表7参照）。

表6 対人恐怖的心性尺度における因子間相関

	尺度Ⅰ	尺度Ⅱ	尺度Ⅲ	尺度Ⅳ
尺度Ⅰ	1.00	.715**	.713**	.608**
尺度Ⅱ		1.00	.782**	.725**
尺度Ⅲ			1.00	.683**
尺度Ⅳ				1.00

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$



表7 対人恐怖の心性尺度の各因子における性差

	男性		女性		<i>t</i>	<i>p</i>
	Mean	SD	Mean	SD		
1. 尺度Ⅰ	2.95	1.64	3.34	1.61	-1.374	.172
2. 尺度Ⅱ	2.74	1.56	3.02	1.79	-.966	.336
3. 尺度Ⅲ	3.12	1.57	3.40	1.64	-.994	.322
4. 尺度Ⅳ	2.44	1.42	2.69	1.69	-.898	.371

### ふれ合い恐怖の心性と対人恐怖の心性の関係

ふれ合い恐怖の心性の下位尺度「対人退却」および「関係調整不全」と、対人恐怖の心性のそれぞれの下位尺度との間に有意な正の相関がみられた（表8参照）。特に、対人恐怖心性の各下位尺度との相関は、「対人退却」に比べ「関係調整不全」の方が高い傾向にある。

また、ふれ合い恐怖の心性尺度と対人恐怖の心性尺度の全項目を一括して因子分析を行った（主因子法、プロマックス回転）。スクリープロットを基準にして第4因子までを抽出した（表9参照）。第1因子はふれ合い恐怖の心性尺度の「関係調整不全」因子の全部と対人恐怖心性尺度の「自分や他人が気になる」因子の全部から成っていた。第2因子はふれ合い恐怖の心性尺度の「対人退却」と一致した。第3因子は対人恐怖の心性尺度の「集団に溶け込めない」および「社会的場面で当惑する」因子のすべてから成っていた。第4因子は対人恐怖の心性尺度の「目がきになる」因子と一致した。

以上の結果から、岡田（2010）<sup>14)</sup>が指摘したように、ふれ合い恐怖の心性と対人恐怖の

心性との間に相関関係が存在し、共通した性質を持つという併存的妥当性と、異なる因子的まとまりを持つという弁別的妥当性が確認された。

### 非行化傾向、ふれ合い恐怖の心性および対人恐怖の心性との関係

非行化傾向の下位尺度と、ふれ合い恐怖の心性および対人恐怖の心性における各下位尺度との相関を表10に示す。「快樂追求」はふれ合い恐怖心性の下位尺度「関係調整不全」と対人恐怖心性の下位尺度Ⅰ「自分や他人が気になる」およびⅣ「目が気になる」と有意な相関関係にある。また、「自制困難」はふれ合い恐怖の心性の下位尺度「対人退却」および「関係調整不全」と対人恐怖の心性の下位尺度Ⅰ「自分や他人が気になる」、Ⅱ「集団に溶け込めない」およびⅣ「目が気になる」と有意な相関関係にある。「不良性顕示」と「迷惑行為」については、ふれ合い恐怖の心性および対人恐怖の心性の各下位尺度との間に有意な相関はみられなかった。

表8 対人恐怖の心性尺度の各因子とふれ合い恐怖の心性尺度の各因子との相関

	対人退却	関係調整不全
尺度Ⅰ：自分や他人が気になる	.292**	.792**
尺度Ⅱ：集団に溶け込めない	.472**	.701**
尺度Ⅲ：社会的場面で当惑する	.314**	.602**
尺度Ⅳ：目が気になる	.406**	.556**

\*\**p* < .01 \**p* < .05

表9 ふれ合い恐怖的心性尺度と対人恐怖的心性尺度による因子パターン（プロマックス回転後）

	原尺度	I	II	III	IV	共通性
人という場面で、言葉がなくなって「しーん」としてしまわないかと不安になる	B	.639	-.172	-.055	.188	.394
他人の本音で自分が傷つけられそうな気がする	B	.751	.075	.112	-.175	.594
他人とちょうどよい距離をとるのが難しい	B	.768	.052	.025	-.177	.512
人といっても話題がなくて困ることが多い	B	.357	.313	.236	-.058	.490
他人は自分を受け入れてくれない	B	.641	.391	-.334	.129	.537
他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる	a	.985	-.273	.007	-.087	.722
自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう	a	.728	-.144	.340	-.156	.710
自分が相手の人にイヤな感じを与えているように思ってしまう	a	.612	.065	.155	.026	.601
自分のことが他の人に知られるのではないかとよく気にする	a	.621	.002	.032	.170	.553
人と会うとき、自分の顔つきが気になる	a	.677	-.067	.038	.118	.544
できれば食事は一人でとりたい	A	-.073	.644	.149	-.071	.396
人と雑談するのは苦手だ	A	.269	-.597	.005	.098	.259
昼食は友達と一緒に食べるのが好きである	A	.126	.513	-.068	.142	.398
友達数人でいる場面は苦手だ	A	.026	.681	.114	-.187	.415
友達と一緒にいるよりも一人でいる方が気が楽だ	A	-.046	.771	.311	-.279	.516
人間と関わるよりも物と付き合っている方が楽だ	A	.014	.661	.047	.098	.555
一人で趣味に没頭していたい	A	.061	.604	-.070	-.034	.354
大勢の友達とワイワイ騒ぐのが好きだ	A	.251	-.606	-.129	-.024	.326
他人と親しくなるのはうっとうしい	A	.008	.746	-.257	.264	.618
できることなら人とあまり関わりになりたくない	A	.055	.877	-.273	.089	.731
集団の中にとけ込めない	b	.180	.032	.640	.093	.687
グループでの付き合いが苦手である	b	.174	.135	.497	.199	.707
仲間の中に溶け込めない	b	.143	.146	.450	.217	.633
人との交際が苦手である	b	-.018	.360	.365	.194	.533
人が大勢いると、うまく会話の中に入っていけない	b	.198	.035	.596	.125	.693
人前に出るとオドオドしてしまう	c	-.026	-.237	.852	.132	.626
授業や会議などで発言するのが困難である	c	.232	-.083	.466	.194	.562
人がたくさんいるところでは気恥ずかしくて話せない	c	-.006	-.024	.718	.211	.677
引っ込み思案である	c	.152	.186	.622	-.116	.485
人と目を合わせていられない	d	-.123	-.126	.081	.893	.534
人の目を見るのがとてもつらい	d	-.077	.073	.093	.769	.585
人と話をするとき、目をどこにもっていいかわからない	d	.209	-.016	.155	.481	.517
顔をジーンと見られるのがつらい	d	-.032	-.036	.137	.633	.428
向かい合って仕事をしている時、相手に顔を見られるのがつらい	d	.033	.041	.276	.541	.610

## 考 察

本論文の目的は、非行化傾向とふれ合い恐怖的心性および対人恐怖的心性との関連を明らかにすることであった。調査の結果、非行

化傾向の下位尺度である「不良性顕示」および「迷惑行為」はふれ合い恐怖的心性、対人恐怖的心性のいずれの下位尺度とも関連がなかった。石井・新堂（2011）<sup>26)</sup>は、一般の高校生および在宅非行少年（軽度非行少年の中で、家庭や職場に戻って家庭裁判所に通う形



表10 非行化傾向とふれ合い恐怖の心性および対人恐怖の心性との因子間相関

	ふれ合い恐怖心性		対人恐怖心性			
	対人退却	関係調整不全	尺度Ⅰ	尺度Ⅱ	尺度Ⅲ	尺度Ⅳ
快楽追求	.058	.215*	.235**	.128	.039	.213*
不良性顕示	.148	.144	.111	.109	.019	.099
自制困難	.274**	.355**	.345**	.240**	.170	.185*
迷惑行為	.108	.029	.023	.085	.057	.116

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

で係属する取扱いを受けた少年)を対象とした調査から、自らの心情を素直に主張したり、親和的に行動したりする「対人的接近スキル」の行使は在宅非行少年の方が一般の高校生よりも多く、逆に自らの心情を正直に吐露しない、関わりを曖昧に避ける対人的距離化スキルの行使は少ない傾向にあることを報告している。この点を考慮すると、「不良性顕示」および「迷惑行為」は対人関係を回避するのではなく、むしろ仲間を求めて群れ、その中で安易に同調し自らの不良性を示し、非道徳的な行動をとることで対人関係を維持していく傾向と関連があると推測できる。

他方、「快楽追求」はふれ合い恐怖の心性の下位尺度「関係調整不全」と、「自制困難」は「関係調整不全」および「対人退却」と関連することが分かった。同時に、「快楽追求」は対人恐怖の心性の下位尺度である尺度Ⅰ「自分や他人が気になる」および尺度Ⅳ「目が気になる」と関連があり、「自制困難」は尺度Ⅰ、尺度Ⅳと同時に尺度Ⅱ「集団に溶け込めない」と関連があることなどが分かった。

ふれ合い恐怖心性の下位尺度「対人退却」は他者と関係を持つ行動そのものについての感じ方を中心とした項目からなっており、「関係調整不全」は対人関係が深まるような行動を取った結果生じられると思われる困難についての項目からなっている(岡田, 2002<sup>22)</sup>)。また、対人恐怖の心性の尺度Ⅰは自分のことを評価する他者、および他者に評価される自己への

とらわれがもたらす不安意識を、尺度Ⅱは集団に対する違和感や不適合感を表し、集団という対人場面に溶け込んで自由にかつ適切に振る舞えないという不安意識を、尺度Ⅳは人と目を合わせることに困難を感じたり、自分に眼差しが向けられたりすることに対する不安意識を表す(堀井, 2006<sup>27)</sup>)。こう考えると、快楽追求の傾向のある者は、他人と目が合うことで自分がどのように評価されているか気になり、対人関係が深まるような場面で不安感が強まる傾向があると言えよう。また、自制困難の傾向のある者は、対人場面に対する不安感情により集団に溶け込めないだけでなく、他者との関係を持つこと自体を拒否し、他者から退却する傾向が強いと言える。

## 引用文献

1. 松井洋：日本の若者のどこがへんなのか－中学生・高校生の国際比較から、川村学園女子大学紀要，第11巻，第1号，101-114，2000
2. 金児暁嗣，中塚善次郎：少年の非行化傾向に関する研究－特に問題行動を中心として，教育心理学研究，第26巻，第4号，219-228，1978
3. 藤間公太：「非行と家族」研究の展開と課題－背後仮説の検討を通じて－，社会

- 研究科紀要, 第72号, 71-87, 2011
- 4.. 土井敏彦: 非行少年の親子関係に関する研究-父母との同一視よりみた-. 科警研報告 防少編, 1, 56-58, 1960
5. 渡辺康: 非行防止地区計画に関する研究 IV-問題児と正常児の家庭環境. 科警研報告 防少編, 2, 29-42, 1961
6. 星悦子, 小宮山要, 川田三夫, 椎名正平: 両親の認知像に関する研究. 科警研報告 防少編, 17, 25-38, 1976
7. 藤田裕司: 校内暴力非行生徒に関する調査研究. 大阪教育大学紀要 第IV部門, 第32巻, 第1号, 87-98, 1983
8. 山口透: 社会変動と家族の病理. 犯罪と非行, 46, 30-50, 1980
9. 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子: 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究(第2報)-ふれ合い恐怖(会食恐怖)の本質と家族研究. 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23 (2), 206-215, 1987
10. 山田和夫: キャンパスの症候群. 福島章(編), 性格心理学講座3-新講座(適応と不適応), 金子書房, 1989
11. 福井康之: 青年期の対人恐怖-自己試練の苦悩から人格成熟へ. 金剛出版, 2007
- 12.. 笠原嘉: 正視恐怖・体臭恐怖-主として精神分裂症との境界線について. 医学書院, 1972
13. 笠原嘉: 青年期-精神病理学から. 中公新書, 1977
14. 岡田努: 青年期の友人関係と自己-現代青年の友人認知と自己の発達. 世界思想社, 2010
- 15.. 沖本忠生: 自己愛の病理としての対人恐怖-発達の観点からの検討. 臨床教育心理学研究, 1, 95-103, 2001
16. 山崎久美子, 吉野真紀, 木下利彦, 小野純平: 大学生における対人恐怖的心性、ふれあい恐怖的心性と両親の養育態度について. 心理臨床学研究, 第29巻, 第6号, 2012
17. 伊藤太郎: 親の過干渉、過期待の病理-日英米の比較に見る親子関係の歪み-. 名古屋女子大学紀要, 52, 57-69, 2006
- 18.. 西村美咲, 井上健: 対人恐怖における優越コンプレックスについて. 臨床教育心理学研究, 34, 1-6, 2008
19. 太宰瑞希・佐野秀樹: 大学生の対人恐怖心性と攻撃性の関連について. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I, 63, 187-194, 2012
- 20.. 秦政春: 子どもたちの規範意識と非行・問題行動. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 26, 123-155, 2000
21. 進藤眸: 非行性の認定(VI) 非行性の概念の統一化(その2-非行性尺度の分析機能から). 『人間科学研究』文教大学人間科学部, 第26号, 105-114, 2004
22. 岡田努: 現代大学生の「ふれ合い恐怖的心性」と友人関係の関連についての考察. 性格心理学研究, 10, 69-84, 2002
- 23.. 堀井俊章, 小川捷之: 対人恐怖心性尺度の作成. 上智大学心理学年報, 20, 55-60, 1996
- 24.. 堀井俊章, 小川捷之: 対人恐怖心性尺度の作成. 上智大学心理学年報(続報), 20, 43-51, 1997
25. 太宰瑞希, 佐野秀樹: 大学生の対人恐怖心性と攻撃性の関連について. 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I, 63, 187-194, 2012
26. 石井佑可子・新堂研一: 在宅非行少年における社会的スキルの様相-メタ認知、対人的距離化スキルの観点から-. 臨床心理学, 第11巻, 第1号, 65-76, 2011

27. 堀井俊章：対人恐怖心性尺度Ⅱの開発－  
対人関係におけるおびえの心性を測定する  
試み．学生相談研究，26, 221-232, 2006